

タブロイド地域紙「市民プレス」第69号(2015/7/5発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

## 目次

- |          |     |               |                       |                         |                     |            |            |             |                      |             |           |          |            |
|----------|-----|---------------|-----------------------|-------------------------|---------------------|------------|------------|-------------|----------------------|-------------|-----------|----------|------------|
| 1        | 2   | 3             | 7                     | 10                      | 15                  | 16         | 18         | 20          | 23                   | 27          | 30        | 32       | 37         |
| 混迷する足利政權 | その一 | 「享徳の乱」の発端は・・・ | 享徳の乱が勃発したところの関東地方(絵図) | 鎌倉公方と関東管領の対立 「永享の乱」は・・・ | 扇谷上杉家と家宰の長尾、太田両家の系譜 | 関東に堀越公方が参入 | 将軍家では内部が分裂 | そのころ関東では・・・ | 将軍の後継と斯波・山名両家の家督をめぐる | 「応仁の乱」が勃発する | 応仁の乱は拡大して | 義尚を擁立するか | 年表…享徳、応仁の乱 |

## 歴史を紐解く

### 混迷する足利政權 その一 享徳、応仁・文明の大乱

八代将軍を継いだ義政は・・・

嘉吉三年(1443)、八才で将軍に選出され、管領の畠山持国らの後見で職を継承する。文安六年(1449)、義政は征夷大将軍の宣下を受け、母の日野重子や乳母の今参局いままじりのつぼねらに囲まれ、疑似父子の關係となった政所の執事、伊勢貞親いせのさだちかなど、側近の強い影響の許で文化人として成長した。

祖父の三代将軍義満や父の政策を復活させることを企図して積極的な活動を開始する。まず側近集団を基盤として守護大名の勢力に対抗し、将軍の親裁権の強化を図る。守護大名たちの



足利義政像(伝土佐光信画、東京国立博物館蔵)

内紛に介入し、東国、鎌倉の争乱にも参戦した。

関東と都で起こった内乱は・・・

永享十年（1438）、関東地方で起こった「永享の乱」は幕府によって鎮圧されたが、つづいて享徳三年十二月（1455）には「享徳の乱」が勃発し、三十年後によく終結した。また京都では、応仁元年（1467）に「応仁の乱」が始まる。十数年に亘る戦乱によって、主要な戦場となった都は灰燼に帰し、壊滅的な被害を受けて荒廃した。

## 「享徳の乱」の発端は・・・

上杉憲忠が謀殺される

発端となったのは、五代鎌倉公方の足利成氏によって関東管領の上杉憲忠が暗殺された事件である。享徳三年の十二月（1455）、管領の屋敷にいた憲忠は、公方・成氏から至急の出仕命令を受ける。そのとき、上杉家の家臣長尾景仲は義兄の長尾実景（江ノ島合戦のち、景仲が家宰を退き、代わって家宰となる）に留守を託し、長尾郷（現・横浜市栄区）の御霊宮へ参詣に出掛けていた。

憲忠が成氏の御所に出仕すると、成氏の命を受けた武士たちに取り囲まれ、憲忠はなすすべも無く謀殺された。また別働隊が管領の屋敷を襲撃し、長尾実景、ほか上杉家の家臣たちを殺害した。

暗殺の報せを聞いた景仲は

鎌倉に戻って直ちに管領の屋敷に火を放つとともに、生き残った人々を扇谷上杉持朝もちとものもつ糟谷館あきやに避難させた。景仲は、持朝（すでに隠居していた）やその嫡男で同家当主の顕房あきふさほか一族の要人と協議して、京都にいる憲忠の弟・房頭ふさあきを次の関東管領に迎えることを決めた。さらに景仲は、嫡男の景信を直接京都に派遣してこと次第を幕府に報告した。

足利成氏の怨恨だったか？

成氏が管領の上杉憲忠を謀殺したのは、かつての永享の乱で、父持氏を死に追いやった上杉氏への恨みでは、と推定されているが、鎌倉府内部の対立が要因だったのでは、とも考えられている。

分倍河原の戦い

年が明けて享徳四年、山内上杉氏が守護を務め、本拠としていた上野国を目指して鎌倉を出発した成氏は、山内上杉方の家宰、長尾景仲・扇谷上杉方の家宰、太田資清を追って、

武蔵国府中の高安寺に入った。一方、この動静を知った長尾景仲は上野・武蔵の兵を率いて府中に向けて出撃し、これと合流するために上杉氏一族は府中近郊に集結した。

上杉軍は二千騎の兵で高安寺に攻め寄せると、成氏軍は武蔵国分倍河原に五百騎をもつて討つて出た。成氏軍の突撃で不意を突かれた上杉軍は混乱したが、新手的五百騎をもつて迎撃した。

### 上杉軍は後退する・・・

しかし緒戦で上杉方は、先鋒の大石房重らが討たれた。大石氏は、関東管領上杉氏のもとで四宿老（長尾氏・大石氏・小幡氏・白倉氏）の一人に数えられ、代々武蔵国の守護代を務めていた。房重はその名門大石氏の嫡男に当たる。

成氏軍にも多くの犠牲が出て、戦況は一進一退となったが、成氏方が激しく襲撃したので、上杉方は後退し始める。しかも相模への退路を絶たれたので、東に向かつて逃走した。成氏軍の追跡は続き、武蔵夜瀬（同三鷹市）で包囲された扇谷上杉家当主の顕房（持朝の嫡男）は自害して果てる。また上杉憲秋（犬懸上杉家の氏憲のりあきへ禅秀の子）は現・日野市、高幡不動の地で自刃した。長尾景仲は辛うじて難を逃れ、常陸国小栗城（現・茨城県筑西市）まで落ち延びる。

### 鎌倉公方・成氏は下総古河に・・・

分倍河原で上杉方を打ち破った成氏は、上杉方を追って三月には下総国古河に到着し、さらに各地に転戦する。敗れた上杉勢が小栗城に立て籠もると、閏四月、成氏は攻め立てて陥落させた、と『鎌倉大草紙』に見える。同書は、康暦二年／天授六年（1380）から文明十一年（1479）まで、百年間の歴史を記し、『太平記』を継承するので、太平後記の別称がある。

ここに関東の戦乱の火蓋は切られ、戦国時代へと誘導されてゆく。

### 上杉勢の反政

憲忠の弟・房顕を後継とした山内上杉家は体制の立て直しを図ると、幕府は上杉氏の支援を決めた。同年四月には後花園天皇から成氏追討の綸旨と御旗を得たので、成氏は朝敵となる。

### 新任の関東管領が着任して

憲忠の弟房顕は京都に在って、関東管領に任命される。成氏征討軍の大將として関東に下向すると、従弟の越後守護上杉房定と合流して上野平井城（現・群馬県藤岡市）に入った。上杉勢は、越後上杉氏の援軍と小栗城の敗残兵とともに下野天命（現・佐野市）の只木山

に布陣する。成氏はその西方の現・足利市の辺りで態勢を整えて対抗し、小山へと移動した。

### 今川範忠は鎌倉を制圧する

一方、駿河守護の今川範忠は天皇から御錦旗を受け取って四月に都を発ち、『康富記』、六月には鎌倉を攻め落とした(『鎌倉大草紙』)。

### 成氏は初代「古河公方」となる

本拠地・鎌倉を放棄した成氏は下総古河を本拠地としたので、「古河公方」と呼ばれ、

### 享徳の乱が勃発したころの関東地方

(註) 東京湾に注いでいた当時の利根川の流路(推定)を記入した。現・利根川は江戸時代の工事によって東遷し、銚子に注いでいる。



古河鴻巣に屋形(古河公方館)を設けた(長祿元年の十月、修復された古河城に移る)。

古河を新たな本拠としたのは、下河辺荘等の広大な「鎌倉公方」の御料所の拠点としてすでに経済的な基盤だったこと、水上交通の要衝だったこと、古河公方を支持する武家や豪族の拠点に近かったことなどが挙げられている。

古河公方側の武家・豪族の中でも、特に成氏は小山持政を強く信頼し、また強固な支持基盤をもつ結城氏の存在が、古河を本拠とする動機の一つになったようだ。

### 「享徳」の年号を使用する

成氏は、上杉氏と抗争するが、幕府には反意がないことを主張していた。しかし、都ではこの年、享徳四年七月に康正と改元され、さらに康正三年九月に長祿と改元されたが、「享徳」を使用し続けて幕府に抵抗する意思を示した。

### 成氏と対峙した上杉勢は敗れる

この年、康正元年十二月、上杉勢の下野天命・只木山の陣が崩壊し、翌康正二年(1456)九月、武蔵岡部原合戦でも敗退した。だが、関東管領の上杉房顕は、本庄台地の最東端に位置する武蔵国五十子(いかご、とも)に「五十子陣」(現・埼玉県本庄市)を構え、長祿元年(1457)のころには、利根川の東北地域を支配する足利方に対して、利根川西南地域

を支配する上杉方の最前戦基地となった。

## 関東は東西に分断される

同年（康正二年）、下野の名門宇都宮氏の当主・等綱ひとつなが、居城の宇都宮城を成氏によって包囲される。しかも成氏方に寝返った重臣達に追放されて流浪の身となり、息子の明綱は成氏に従う。

一方、幕府方の上杉房顕は武蔵に入って成氏と交戦を続けたので、関東北部は東西両陣営に分割され、その境界は利根川（当時は江戸湾に向かって流れていた）で、東側を古河公方（足利成氏）が、また西側は関東管領（上杉氏）が支配することとなる。

## 家督を譲っていた上杉持朝は

嫡男の顕房が分倍河原の戦いで成氏軍に討たれたので当主として復帰する。持朝は文安四年（1447）に関東管領となった憲忠に娘を嫁がせて実力者となったが、憲忠が誅殺されると、その後任となった彼の弟・房顕を擁し、裏方として実権を握った。

持朝は古河公方の足利成氏に対抗するため、家宰の太田資清・資長父子に河越城（川越城）と江戸城を築城させる（康正二年 $\wedge$ 1456 $\vee$ 長禄元年 $\wedge$ 1457 $\vee$ ）。さらに五十子陣とつないで攻守網を完成し、自らは河越城を居城として武蔵の分国化を進めたので、扇谷上杉家

は急速に南関東に勢力を拡大した。

## 成氏も攻守網を形成して対抗

上杉氏が築いた諸城の防衛線を目前にした成氏は、古河城を中心として、築田氏を関宿城に、野田氏を栗橋城に、また一色氏を幸手城、佐々木氏を菖蒲城に置いて攻守網を構築したので、両者は拮抗する態勢となる。

# 鎌倉公方と関東管領の対立

## 「永享の乱」は・・・

永享十年（1338）、足利氏の血筋を引く鎌倉公方の足利持氏は、関東管領の職を独占してきた上杉家の憲実と、管領の補任権を握っていた幕府に対抗したので、これに介入した六代将軍義教は持氏の討伐を命じて戦は始まった。

## 「鎌倉府」の成り立ちは・・・

廻って、尊氏の弟の直義たかよしが鎌倉に在ったころ、室町幕府は関東を統治するために「鎌倉府」

を設置した。その首長を関東管領、補佐役を関東執事として任命したが、後に、直義を祖とする関東管領は、將軍家に擬えて「鎌倉公方」と称し、また関東執事の上杉氏は、これに倣って自らを「関東管領」と僭称するようになる。

直義の子孫の「鎌倉公方」方と、「関東管領」を独占して来た上杉家は、任命に関わる將軍を介して対抗するようになり、本来の相補体制は崩壊した。山内上杉家は関東管領を独占してきたが、扇谷上杉家も力を得、さらに両家の家宰を務める長尾氏、太田氏は互いに縁戚にもなつて活動した。

扇谷上杉家の由来は・・・

足利尊氏の母方の叔父にあたる上杉重顕を祖とする家系で、初代の上杉顕定（正平六年／観応二年／1351に生まれる）は、丹波守護だった養父・朝定の許を離れて、貞治年間頃（1360年代）、関東に下向した。鎌倉公方の足利氏満に任せ、鎌倉扇谷の地に居住したので、扇谷上杉家と呼ばれる。

顕定は天授六年／康暦二年（1380）、三十才で死去したので、養子の氏定が後を継ぐ。扇谷家は他の上杉諸家と同じく関東管領を継承する家格となったが、宗家として山内上杉家が関東管領を独占したため、勢力を持つ家柄にはなれなかった。

応永二十三年（1416）の上杉禪秀の乱で氏定は、当初劣勢だった持氏方に合力するため出陣したが、禪秀の反乱軍に敗れて重傷を負い、持氏らが鎌倉を退去する際には同道することができず、藤沢で自刃した。

持朝は扇谷上杉家を興隆させる

嫡男の持定が家督を継承したが持定も間もなく没したので、弟の持朝がその後を継いだ。持朝は応永二十三年の生まれ、幼かったので従兄弟の上杉定頼（小山田上杉家）の補佐を受ける。

「永享の乱」では、二十二代の関東管領上杉憲実に従つて持氏の討伐に功績を挙げる。永享十二年（1440）の結城合戦でも室町幕府軍の副将を務めて武功を立てた。結城合戦後に憲実は隠退を表明したが、後継者として指名された弟の清方の力量に幕府は不安を覚え、たので憲実の復帰を説得する。また、清方の補佐として持朝の協力を期待した。持朝は永享の乱の後、修理大夫に任ぜられ、続いて結城合戦後には相模守護となる。さらに清方が急死して、文安四年（1445）憲実の子の憲忠が二十二代の関東管領に就任すると、娘を憲忠に嫁がせ、持朝は実力者として認められる。

しかし持朝は出家する

文安六年（1449）、幼かった八代将軍義政に征夷大將軍が宣下、また鎌倉府の再興が承認されて、持氏の子が鎌倉公方に復帰した。

持朝は、かつて持氏を滅ぼしたことを憚って嫡男の顕房に家督を譲り、出家して道朝と号した。なお、持氏の遺児として生まれた新公方は、のちに成氏と呼称される。

永寿王丸は成長して成氏に

結城合戦で捕えられた持氏の遺児は、京都に連行中に将軍・義教が暗殺されるという争乱（嘉吉の乱）が起こったため、幸運にも生き延びた（『建内記』）。四才だった永寿王丸（永寿丸、または万寿王丸）は、宝徳元年（1459）八月に京都から鎌倉に向け出立し、五代鎌倉公方に就任した（異説あり）。先代が暗殺されたのは永享十一年（1439）だったので、十年もの間、鎌倉府は閉鎖されていたことになる。

鎌倉公方を継いだ成氏は・・・

元服して、将軍・義成（後の義政）から「成」の一字を与えられ、「成氏」という名が決まると、左馬頭に任じられ、従五位下に叙される。鎌倉に戻った足利成氏は徳政を行う。公方の権威を諸国に向けて誇示しようとしたのでは、と推測され、宝徳三年（1459）には、

従四位下左兵衛督に昇進した。

江の島合戦起こる

鎌倉府は再興されたが、管領方の山内・扇谷両上杉氏と鎌倉公方との対立は変わること無く、不安定な情勢は続いていた。宝徳二年（1459）、山内上杉家・家宰の長尾景仲と景仲の婿で扇谷上杉家・家宰の太田資清が成氏を襲撃する事件が発生する。成氏は鎌倉から江の島に避難し、家臣の活躍によって、長尾・太田連合軍を退けた。

江の島合戦は和議に抛って終結したので成氏は鎌倉に戻り、上杉憲忠は関東管領として鎌倉に帰参した（『鎌倉大草紙』）。しかし、足利成氏と上杉氏との対立を解消することは出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

山内上杉家家宰の長尾景仲は、上野・武蔵守護代、上野群馬郡白井城主で、鎌倉長尾氏・房景の次男として生まれる。母方の伯父の婿養子として「白井長尾氏」の家督を継いだ。子に景信、忠景、景明、娘は太田資清（道真）の正室となる。孫には長尾景春（嫡孫）、太田資長へ道灌、資忠（外孫）がいる。

扇谷上杉家家宰、太田資清は・・・

摂津源氏の流れを汲み、資清の祖先となる源資国が丹波国桑田郡太田（現在の京都府亀岡市葦田野町）を拠点として太田氏を称したという。太田資清は相模守護代で、父は太田資房、太田氏の通字は「資」。長尾景仲の娘が資清の正室となり、その子が資長、資忠となる。

### 鎌倉公方の動勢

一方、幕府内部では、享徳元年（1500）、幕府管領が畠山持国から細川勝元に替わる。勝元は鎌倉公方に対して厳しい姿勢をとり、関東管領の取次がない書状は受け取らないという方針によって、関東を直接統治する幕府の意思を示した。

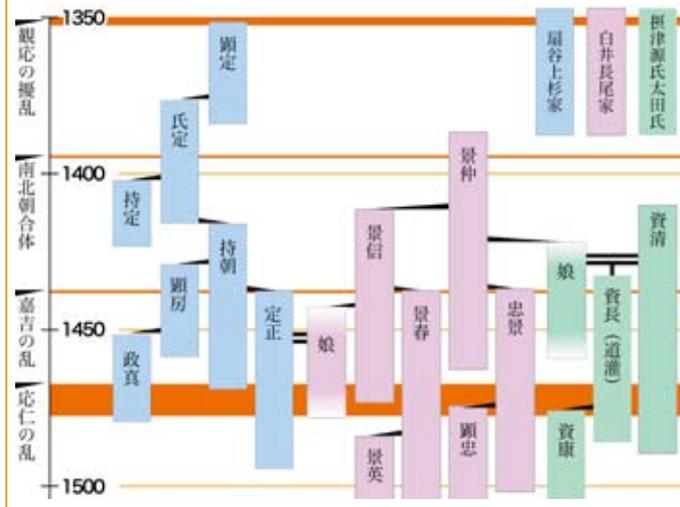
## 関東に堀越公方が参入

政知まさちともが関東に下向して・・・

各勢力が膠着状態となった関東に向けて、長祿二年（1500）、將軍義政は古河公房・成氏への対抗策として、異母兄の政知（僧職に在ったが、還俗させて）を鎌倉公方に任じて東下させた。政知には山内上杉家ほか配下として付けられ、実権は全て幕府が握っていた。そこで関東に在任する武士の協力が得られず、鎌倉には入れなかった。止む無く手前の伊豆の堀越に入って「堀越公方」となる。同年、

義政は関東への派兵を見送る

將軍と重臣に推されて武衛家当主となった斯波義敏は、越前・尾張・遠江の三ヶ国守護を継承して、享徳の乱の鎮圧のために関東に派兵することを命ぜられた。しかし、越前守護代との争い（長祿合戦）を引き起こしたため、義政の忌避に触れ、斯波氏の当主は交代して、関東への派遣は中止された。



扇谷上杉家と家宰の長尾、太田両家の系譜

関東の争いに幕府も加わって

関東管領山内上杉・扇谷上杉両家に幕府と堀越公方が加わって、下野・常陸・下総・上総・安房国を勢力範囲とする古河公方と、それら諸国の豪族に対抗したので、関東を二分する争いは続いた。

五十子で両陣営は争う

長祿三年（1459）、関東管領上杉房頭は、五十子に城砦を築いて持朝・房定（山内上杉）・教房（犬懸上杉）とその子、政藤ら一族を結集させた。これを知った足利成氏は五十子に出撃して、十月、両軍は近くの太田庄（現・埼玉県熊谷市）で交戦した。上野の岩松家純・持国が上杉軍に加勢するとの報を得た上杉房定・政藤は翌日利根川を渡って上野側に陣地を張る古河軍を羽継原・海老瀬口（現・群馬県館林市）で攻撃をかけたが敗北した。しかし、古河軍も撤退したため五十子は上杉軍の手に確保され、以後房頭はここを拠点として長期戦の構えを見せ始める。

持朝は堀越公方の敵方となる

一方、持朝は寛正元年（1462）、兵糧料所（兵糧米を徴収するために指定された所領）の設置を巡って、堀越公方の政知と敵対関係になった。そこで政知を支援する將軍義政からが果たせなかった。

持朝は詰問を受ける（政知の執事の讒言による、ともいわれている）。責任を負って三人の重臣が引退したため、持朝の勢力が低下した。持朝は、成氏と和睦して政知と争おうとしたが果たせなかった。

## 將軍家では内部が分裂

義政は日野富子と結婚して

康正元年（1455）、日野富子、十六才と結婚する。日野家は將軍家と縁戚関係を持ち、富子は義政の生母（重子）の姪に当たる。そのころ義政は、政治活動に積極的に取り組む姿勢が見られたが、間も無く側近と守護大名の対立などが起こり、政治的な混乱が続くようになる。もつばら茶の湯・作庭・猿樂などに没頭する。そこで幕政は実力者の管領家・細川勝元、四職家の山名宗全（諱は持豊で、宗全は出家後の法名）、正室の日野富子らに左右された。

飢饉と徳政一揆に悩まされる

長祿三年（1459）から寛正二年（1461）にかけて全国的な早魃によって飢饉が発生し

た（長祿・寛正の飢饉）。京都では長祿三年八月に台風が直撃したため、賀茂川が氾濫して家屋が流出、数多の死者が出た。翌年にも大雨による水害と早魃が交互に訪れ、更に虫害と疫病も加わって飢饉は全国で拡大した。寛正二年（1461）には飢饉がより深刻化した。大量の流民が市中に流れ込み、飢餓と疫病によつて京都では、二ヶ月で八万人余りの死者が出たといわれている。

だが、將軍義政はその最中に「花の御所」を改築し、世事には全く関心を示さず、堪りかねた後花園天皇が勧告されても無視した。

寛正三年九月、京都で徳政令を求める土一揆が発生し、浪人や在京大名の内者（家人）も加わつて、財物を奪つたり火を放つなどの行為に及んだ。

京都で再発した一揆は京都七口（京都につながる街道の代表的な出入口、関所）を封鎖したので、幕府は諸大名に鎮庄を命じ、処刑も含めた過酷な取締りが行われる。

### 義政は政治に倦んで隠遁を望む

各地で発生する一揆や政治的な混乱に倦んだ義政は、將軍職を引退して隠遁生活を送ることを夢見るようになり、

### 実弟の義尋に職を譲る

義政は二十九才になつても、富子や側室との間に後継男子が無かつたので、將軍の職を実弟の義尋（浄土寺門跡）に譲ることを思い立つた。義尋は、まだ若い義政に後継男子が誕生する可能性があると考え、就任の要請を固辞した。しかし、義政が再三説得したため、寛正五年十一月（1464）、義尋は意を決して還俗する。義視と名を改め、細川勝元の後見を得て今出川邸に移った。

### 義政・富子の実子を將軍に

將軍の職を実弟に譲つた翌年の寛正六年十一月（1465）、義政と富子との間に義尚（のちに義熙と改名）が誕生する。実子が將軍職に擁立されることを切望する富子は、義尚の擁立を目論み、義尚の後見となつた山名宗全や実家の日野家はこれを支持して義視と対立した。

## そのころ 関東では・・・

### 足利長尾氏の活躍

父の実景が享徳三年（1454）、関東管領の上杉憲忠とともに殺害されたため、家督を継

いだ長尾景人は、寛正六年（1465）、憲忠の弟の房頭の推挙によって、室町幕府から下野足利荘の代官に任命される。房頭に任せ、翌年十一月、勧農城（現・栃木県足利市岩井町に在った平山城）に入部して、下野に上杉方の拠点を築く。鎌倉長尾氏の景人の一族は、以後足利長尾氏と呼ばれるようになる。

#### 長尾景人は戦中に死去する

応仁二年（1468）に勃発した上野綱取原合戦に出陣し、文明三年（1471）には下野に出陣して古河城を落とす。しかし、翌年、成氏の反撃によって足利荘に攻め込まれ、長尾景人は、その戦いで亡くなって（享年は二十八と推定される）、嫡男の定景が後を継いだ。

#### 若年の房頭が五十子で死没

享徳四年、鎌倉公房の成氏を征討するため、関東に下向した山内上杉房頭は、武蔵太田庄の戦いで大敗を喫し、また寛正四年（1463）には、彼の右腕だった同家・家宰の長尾景仲が鎌倉で病没したため、管領の辞意を表明した。しかし、幕府に拒絶され、寛正七年（1466）二月、房頭は五十子で陣没した（享年三十二才）。

#### 上杉顕定が二十四代関東管領に

房頭には男子がいなかった。長尾景仲の嫡男で、後継者となつた家宰の長尾景信は、房頭の従兄弟で上杉一族の重鎮だった越後守護・上杉房定の子に跡を継がせようとした。房定はこれを拒否したが、同年十月、將軍・義政から、房定の子を後継とするよう改めて命じられ、房定の次男の龍若（名を改めて顕定）が山内上杉家の家督を継いで当主となる。顕定は、関東の争乱期、四十年以上にわたって関東管領を務めた（在任：1466～1510）。

#### 扇谷上杉家持朝の死

応仁元年（1467）、扇谷上杉家を興隆させた持朝が五十二才で死去する（法号は広感院道朝）。持朝の生涯の活動は、名門の山内上杉家に対抗する礎を築いたが、一方では、その動静が関東一帯を複雑な権力闘争に陥れた一因となつたことは否めない。

持朝の嫡男・顕房は、享徳の乱の緒戦となった分倍河原の戦いで早世したので、顕房の遺児（持朝の孫となる）政真が継いだ。しかし彼も、文明五年（1473）、武蔵五十子の戦いで戦死した。その跡目を継いだのは、持朝の三男で顕房の弟の定正だった。

#### 古河公方と堀越公方の争い

文明三年（1471）三月、成氏は小山氏・結城氏の軍勢と共に遠征して、伊豆の堀越公方を攻めたが、敗れて古河城に撤退した（『鎌倉大草紙』）。この遠征失敗の影響は大きく、小山氏・小田氏等の有力な豪族が幕府の帰順命令に応じるようになる。

五月、上杉勢の長尾景信（景仲の子）が古河公方に対して攻撃を開始すると、成氏は本佐倉の千葉孝胤の元に退避した。しかし上杉勢も古河城に入るだけの力がなく、文明四年、千葉孝胤、結城氏広、那須資実とその弟らの支援によって、成氏は古河城に帰還し、小山氏も再び成氏方に戻った。

### 長尾景春の乱へ・・・

文明八年（1476）、山内上杉家家宰の後継をめぐって勃発した長尾景春の反乱は、関東各地に飛び火した。

## 将軍の後継と斯波・山名両家の家督をめぐって

### 義政・富子の実子を将軍に

前記したように、義政が将軍職の後継を実弟に決めた翌年、義政と富子との間に義尚が誕生したので、富子は実子が次期の将軍となることを切望した。義尚の後見となった山名宗全や実家の日野家はこれを支持して義視と対立する。

さらに幕府の実力者だった勝元と宗全の対立や斯波氏、畠山氏の家督相続問題などが複雑に絡み合って大乱が勃発し、都は壊滅的な打撃を受ける。

### 将軍義政は専制政治・・・

守護大名の家督に介入した義政は、側近の政所執事伊勢貞親らの進言によって、文正元年（1466）七月、幕府三管領筆頭の斯波・武衛家の家督を斯波義廉から取り上げて先代の義敏に与えた。

しかし、諸大名はこれに反発したので、伊勢貞親ら義政の側近は都から追放される（文正の政変）。そこで斯波家の家督は義廉に戻され、将軍の側近政治は崩壊した。彼が意図した施政の専制は困難となり、義政の側近と守護大名との対立は激しくなつてゆく。

また諸大名では、そのころ内部騒動が頻発していた。

### 管領の畠山家では・・・

畠山家では、当主持国の家督継承をめぐるお家騒動が持ち上がった。持国は嫡出の男子が無かったので弟の持富を後継としていた。



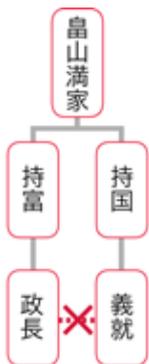
ところが、文安五年（1448）庶子の義夏（のちの義就<sup>よしひろ</sup>）よしなり（とも）を召し出し、持富を廃嫡して後継とした。八代将軍の義成（のちの義政）から裁可を得、元服して義成の偏諱<sup>へんき</sup>を受ける（偏諱<sup>へんき</sup>）。翌文安六年、父には代わって梔飯<sup>ちうばん</sup>（接待・饗応）を務め、宝徳三年（1451）には伊予守に叙任されて持国の後継者であることを示した。享徳四年（1455）に義就と改名、父の死去により家督を継承した。

### 義就から政久、政長への支持に

しかし、一部の家臣の反対に遭って、持富の子の政久（弥三郎）が後継者として擁立された。享禄三年（1454）、山名宗全と細川勝元は政久を庇護し、持国と義就を都から追放した。

一方、將軍義政は義就を支持したので義就は上洛し、義政と対面して家督相続が認められた。畠山家臣団も政久派と義就派とに分裂したが、義就は次第に將軍から疎遠になって、長禄三年（1459）には政久が赦免される。間もなく政久が死去すると、畠山家の有力な家臣の支持によって、その弟の政長が後継となった。

畠山家の系図



政長は將軍義政から偏諱を受け、寛正五年（1464）には細川勝元（妻の従兄弟にあたる）の後任として管領に就任する。

### 畠山政長と義就は対決する

長禄四年、家督が政長に移ったため義就は反発したが、打つ術が無く、寛正四年（1463）には吉野に逃れた。

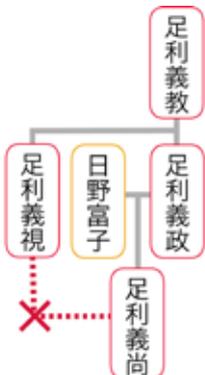
翌年、將軍義政の母親の重子が没したさい、畠山義就は赦免された。しかし、追討令の解除に過ぎず、当主への復帰は認められなかった。

また富樫氏、小笠原氏、六角氏でもお家騒動が起こって、幕府はこれらの調停を行った。しかし、その対応は首尾一貫していなかったため、火種を残した。

### 細川勝元と山名宗全の対立は

文安四年（1447）に勝元が宗全の養女を正室としたので、それ以来、細川・山名の両家は縁戚関係にあり、畠山持国に対抗していた。ところが、寛正六年（1465）に義政と富子との間に実子の義尚が誕生すると、義視の後見人・細川勝元と義尚を押す山名宗全とが対立し、次第に激しさを増

足利將軍家の系図



す。將軍家の家督争いは全国の守護大名を巻き込んで、勝元派と宗全派に二分され、その衝突は避け難いものとなる（『応仁記』）。

## 「応仁の乱」が勃発する

### 畠山家は細川派と山名派に分裂

文正二年（1467）一月、山名宗全は、文正の政変による混乱に乗じて義就を擁立する。また細川勝元が支援する畠山政長の管理職を取り上げて出仕停止処分とし、代わりに將軍義政に強制して斯波義廉を管領に任命させた。そこで義就は山名派に、また政長は細川派に与することとなり、分裂した畠山家は京都を戦場として互いに戦うことになる。

### 御霊合戦が勃発する

將軍義政は、細川勝元に対して、畠山政長への援助を中止するよう命令したので、追いつめられた政長は自ら屋敷に放火し、北上して京都郊外の上御霊神社に陣取った。宗全方の義就は後土御門天皇・後花園上皇らを内裏から室町亭に避難させる。宗全・斯波義廉らに拳兵を促された畠山義就は、政敵となった同族の政長の陣地に進軍して合戦は始まる。

上御霊神社は西側には川、南側は相国寺の敷大堀が引かれていたため、攻め口は東と北だけだった。政長と家臣らは義就方と戦ったが孤立すると神社の拜殿に放火し、勝元の屋敷に逃げ込んだ。合戦は義就の勝利に終わり、義政が諸大名と調停したため戦乱の拡大は避けられた。ところが、両派は京都への軍勢の召集を止めようとはしなかった。

### 上京の戦いから・・・

この年、文正二年（戦乱のため三月に、御土御門天皇によって改元されて応仁となる）、不穏な情勢は続いて、三月の節句には細川派と山名派が争い、山名派の被官が殺害される事件が発生し、山名派の兵糧を細川軍が奪ったり、畠山義就の家臣が細川派の被官を襲ったりして京都の治安は悪化した。

五月に入って細川勝元は諸大名を地方に派遣し、山名派の基盤を崩す戦略を立てた。細川派の斯波義敏は斯波義廉の領国越前へ、赤松政則の家臣宇野政秀は宗全の領国播磨へ、土岐政康は一色義直の領国伊勢に攻め入った。さらに勝元は諸大名の上洛を要請し、宗全も軍勢を動員して京都に集結させる。

### 東西両陣営に分かれて

両軍の本陣と勢力範囲が定められ、細川派は勝元邸と花の御所を中心として京都北部か

ら東を、山名派は京都の西を流れる堀川西岸に在った宗全の屋敷と京都中央の斯波義廉の屋敷を拠点として西と中央とを固める。両陣営の縄張りがほぼ決まると、勝元軍と宗全軍はそれぞれの屋敷の位置から東軍・西軍と呼ばれる。なお有名な着物の「西陣織」の「西陣」の地名は、西軍の陣地に由来する。

東軍(細川勝元・足利義視ら)は二十四ヶ国の兵約十六万を、また西軍(山名持豊・足利義尚ら)は二十ヶ国の兵約十一万とも、を動員したという(ただしこの『応仁記』の既述には誇張があるといわれ、各荘園、郷村(村里、田舎)からは荘官、在地土豪層を中心に騎馬、半甲冑、人夫の兵団が徴発された。また京都周辺では京中悪党、疾走の徒などの足軽傭兵が補充された。後者の活躍が目立ったのは、地方の農民軍隊では長期の在京が困難だったためだった)。

### 市街戦から戦いは始まる

五月二十六日、上京で戦いが始まる。東軍は夜明け前に堀川支流の小川西岸、東岸の要衝を占拠した。義政の側近として、花の御所の隣りに与えられていた一色義直の屋敷を占拠するため、東軍は夜明け頃に奇襲する。義直は反撃出来ず、宗全の屋敷に逃亡した。山名軍は宗全邸付近まで退却する。

### 優位に立った東軍は・・・

続いて中央の一条大宮で市街戦が行われる。勝元の同族の備中守護細川勝久の屋敷は堀川西岸に在り、西軍の勢力圏で孤立していたので、西軍はこの邸宅に向けて攻撃を開始した。斯波義廉が家臣を連れて勝久邸に向かい、対する東軍は勝久の救援に出勤して一条通りを西進、斯波軍に攻めかかったが反撃に遭う。東軍は一条通りから南に下がった正親町通りを進み、迂回して斯波軍と交戦した。戦闘は早朝から翌日の夕刻まで行われたが、両軍共に疲弊して戦線は膠着する。ついで將軍義政の停戦命令が出されて戦闘は停止する。東軍は花の御所を押さえたため優位に立ち、義政は六月に勝元に對して將軍家の旗を与え、官軍と認めた。

## 応仁の乱は拡大して

状況を打開するため山名宗全は、周防・長門守護大内政弘に出陣を要請した。これに応



京都北部の図 賀茂川の西方を両軍が占拠する

じた大内軍は東進して京都に向かい、戦いは本格化する。  
西軍が優勢になると

六月初ころから西軍の援軍が到着し始め、八月には周防の大内政弘が、伊予の河野通春ら七か国の軍勢一万と二千艘の水軍を率いて入京したので西軍は勢力を回復する。天皇・上皇は室町亭に避難したが、東軍の総大将だった義視が出奔して伊勢に逃亡する。天皇・上皇は室町亭に避難したが、東軍の総大将だった義視が出奔して伊勢に逃亡する。

大内政弘は船岡山に陣取り、九月、三宝院（現・伏見区に在り）に火を放つ。郊外の南禅寺裏の山（現・左京区）でも戦いが勃発（東岩倉の戦い）し、十月の相国寺の戦いでは激戦となつて両軍に多くの死傷者を出したが、勝敗を決するには至らなかった。しかし、焼滅した相国寺跡に西軍の斯波義廉が陣取り、畠山義就は山名宗全邸の西に移つて、東軍は劣勢に立たされた。

#### 戦いは市中から洛外に

応仁二年（1468）三月、北大路烏丸で大内政弘は東軍の毛利豊元（安芸国、毛利氏）・小早川熙平（安芸国を拠点とする沼田小早川氏）と交戦し、五月には東軍の細川成之（阿波・三

河・讃岐守護、阿波細川家）が斯波義廉邸を攻める。また細川勝元が山名宗全の陣を攻撃する。八月には勝元の兵が相国寺跡の畠山義就の陣を攻めたが、戦闘は次第に洛外に移り、両軍は山科、鳥羽、嵯峨で交戦した。

下絵図の「紙本著色真如堂縁起」は三巻。上巻は、天台宗円仁ゆかりの本尊、阿弥陀如来像の由来、中巻は真如堂建立の由来や戒算・貞慶・法然などの逸話、下巻は応仁の乱以降の本尊の流転と再建の歴史が描かれている。詞書は後柏原天皇、尊鎮法親王（後柏原天皇の皇子）、三条西実隆（後柏原天皇の縁戚関係の公家）らの筆で、詞書の起草者から筆者までの制作事情がすべて明らかでない稀有な絵巻物である。

#### 義尚を擁立するか・・・

九月となり、しばらく伊勢に滞在していた義視が勝元や義



応仁の乱 「紙本著色真如堂縁起」・下巻（部分） 真正極楽寺（京都）蔵 作者：掃部助久国 大永4年（1524）

政に説得されて東軍に帰陣した。将軍・義政は閏十月、文正の政変で義視と対立した伊勢貞親を政務に復帰させ、義尚の擁立に動き出した。

義視を新将軍として・・・

一方、細川勝元は義視の擁立には動かず、出家を勧めた。そのため義視は再度出奔して比叡山に登る。西軍は比叡山に使いを出して義視を迎え入れ、新将軍として奉り、正親町三条公躬、葉室教忠らも西幕府に祇候（奉仕して御機嫌を伺う）し、幕府の体裁を整えた。以降、西軍では義視が発給する御内書によって命令が行われ、独自に官位の授与も行うようになる。

大内氏の活動は・・・

大内政弘の圧倒的な軍事力によって山城（現・京都南部）は、次第に西軍によって制圧されたので、京都市内での戦闘は散発的なものとなり、戦場は摂津・丹波・山城（京都に近い「畿内」）に移ってゆく。そのため東軍は反大内氏の活動を活発化させる。

文明元年（1469）には、大内氏の重臣が離反して内領に侵攻する。また文明二年にも反乱が起こったが、何れも留守居のものに撃退されたため、政弘は軍を引くことなく、山城の大半は西軍の制圧下に在った。

厭戦気分が漂う・・・

それ以降、東西両軍の戦いは膠着状態に陥った。長引く戦乱と盗賊の跋扈によって何度も放火された京都の市街地は焼け野原と化し、さらに上洛していた守護大名の領国にまで戦乱が拡大したので、京都での戦いに専念できなくなる。かつて守護大名達が従ってきた幕府の権力そのものが失墜したため、戦いを続けても、得るものは最早何も無かったのである。やがて東西両軍の間には厭戦気分が漂うようになってゆく。

有力武将を寝返らせる

文明三年（1471）五月、斯波義廉の重臣で西軍の主力だった朝倉孝景が将軍義政から越前守護職に補任され、東軍側に寝返った。幕府側は決定的に有利となる。

文明四年になると、勝元と宗全の間で和議の話し合いが持ち上がった。しかしこの交渉は山名氏と対立する赤松政則（赤松家を再興し、播磨へ現・兵庫県、美作、備前へ現・岡山県）の守護職を回復した中興の英主として知られている）の抵抗で失敗する。三月、勝元は剃髪し、五月には宗全が隠居する。

幕府の業務が再開して・・・

文明五年の三月には宗全が、また五月には勝元が相次いで死去する。十二月には義政が

義尚に將軍職を譲つて隠居した。すでに幕府では長らく空席だった侍所頭人(所司)に赤松政則が任ぜられ、政所の業務も政所頭人(執事)の伊勢貞宗によつて再開され、業務の回復に向けた動きがみられた。なお管領は、富子の兄である公家の日野勝光が幕府の役職に就かないまま、職務を代行する。

#### 日野富子が実権を把握する

一方で富子の勢力は拡大し、義政の実権は失われていった。義政は文明三年(1471)ころから、細川勝元が所有する邸宅(現・上京区堀川)を利用したが、のちには「小川御所」または「小川殿」と呼ばれる。隠居した義政はここに移つて(文明六年〜七年)、室町邸には富子と義尚が残された。

#### 小競り合いは慢性的に起こる

文明六年四月、山名宗全の後継者となつた政豊と細川勝元の子、政元との間に和睦が成立したが、その後も東軍は細川政元・畠山政長・赤松政則、西軍は畠山義就・大内政弘を中心に情性的な小競り合いが続く。

#### 応仁の乱は終息に向かう

文明五年に山名、細川が亡くなり、義政は將軍の職を義尚に譲つて隠居する。また文明

八年に花の御所が焼失したので義政は小川殿に移る。



次号では、文明八年、関東で勃発した「長尾景春の乱」と、これを鎮圧した扇谷上杉家の家宰、太田道灌の活動を語り、さらに応仁の乱の終焉に沿つて、將軍義政と正室の日野富子、次の將軍を継いだ義尚との間の対立と葛藤、混乱に陥つた室町幕府の動静に目を向けてみよう。

戦乱に併せて、かくも激しい混乱の世に、將軍義政らによつて比類の無い「東山文化」が生まれたプロセスを追うことにしたい。

次号は『混乱する足利政権 その二』

[享徳の乱は終息する ⇨ . . . . [応仁の乱が終る ⇨ . . . . . ⇨ ⇩ 応仁の乱が始まる] . . . . ⇩ 享徳の乱が発生する]

1484	1483	1482	1481	1480	1479	1478	1477	1476	1475	1474	1473	1472	1471	1470	1469	1468	1467	1466	1465	1464	1463	1462	1461	1460	1459	1458	1457	1456	1455	西暦	
文明16年	文明15年	文明14年	文明13年	文明12年	文明11年	文明10年	文明9年	文明8年	文明7年	文明6年	文明5年	文明4年	文明3年	文明2年	文明元年	応仁2年	応仁元年	文正元年	寛正6年	寛正5年	寛正4年	寛正3年	寛正2年	寛正2年	長祿4年	長祿3年	長祿2年	長祿元年	康正2年	康正元年	元号
足利義尚												足利義政																			
<p>義政は長谷聖護院の山荘に移る</p> <p>足利義尚権大納言に転任</p> <p>徳政一揆が問所を破壊する</p> <p>一月、幕府と足利成氏との和睦が成立（都鄙合体） 享徳の乱が終息する</p> <p>義政は東山の屋敷に住み、能や茶の湯に（東山文化） 義尚は伊勢貞宗邸に居住する</p>												<p>細川勝元、山名持豊が死去する</p> <p>義尚に征夷大將軍宣下、九代將軍となる</p> <p>持朝の三男の定正が扇谷上杉家の家督を継ぐ</p> <p>太田道灌が江戸城内で歌合の会を催す（江戸歌合）</p> <p>義政は堀川の小河御所を建設して移る</p> <p>文明十二年（1480）にかけ関東管領上杉氏の有力家臣長尾景春の反乱が始まる</p> <p>武蔵国五十子の戦い、応仁の乱が終息する</p>															<p>一月、享徳の乱が勃発、足利成氏は古河公方となる</p> <p>將軍足利義政と日野富子が結婚する</p>				
												<p>太田道真／道灌は河越城・江戸城を築城する</p> <p>足利政知は下向して「堀越公方」に</p> <p>長祿合戦（越前守護斯波義敏と守護代の戦い）</p> <p>武蔵国五十子の近傍で「太田庄の戦い」</p> <p>この年から寛正2年にかけて「長祿・寛正の飢饉」</p> <p>畠山政長は將軍から偏諱を受ける</p> <p>京都で多くの死者が発生するが將軍義政はこの間に花の御所を改築する</p> <p>全国的な飢饉で、京都では八万人が餓死する</p> <p>寛正の土一揆</p> <p>義政は弟の義視を後継ぎに決める</p> <p>義政、富子の実子（のちの將軍義尚）が誕生</p> <p>義政の側近伊勢貞親らが追放される（文正の政変）</p> <p>応仁の乱が発生する</p> <p>扇谷上杉家持朝が死去する</p> <p>応仁の乱は拡大して洛外に</p> <p>応仁の乱、東西兩軍の戦いは膠着する</p> <p>太田道真が河越城内で連歌の会を催す（河越千句）</p> <p>上杉氏は足利成氏の居城の古河を攻める。大石顕重はこれに参戦し、足利義政から感状を受ける</p>																			

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

市民フォーラムは地域情報紙「市民プレス」を編集・発行し、無料で配布します。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

編集部 原宛にどうぞ

TEL 090 (3048) 5502

本紙「市民プレス」は年四回(一、四、七、十月、各五日)発行